



まちづくり研究センター報告書

2019年度

文京学院大学まちづくり研究センター
Social Design Center

巻頭挨拶

まちづくり研究センター長 古市太郎（本郷）

副センター長 中山智晴（ふじみ野）

2019年4月、まちづくり研究センター(通称：まちラボ)は、ふじみ野キャンパスと本郷キャンパスそれぞれに開所しました。開所に際して、様々な方にご助言をいただきお世話になりました。この場をかりまして、御礼申し上げます。

さて、本郷キャンパスでの取り組みは、すべてが手探りで始まりました。今年度は「教育および授業」に力点を置いて展開してきました。具体的には、後に紹介されるように、コミュニケーション社会学科の必修授業である「まちラボプロジェクト演習I・II」の6つのプロジェクトをベースに施設利用が行われており、後期からは他学部・他学科のゼミなどでも利用されてきました。

ふじみ野キャンパスでの取り組みは、都市－農村交流による過疎地域の活性化、商店街の活性化などの社会問題を中心に進められました。これらは単位化される科目ではなく、すべてボランティアベースの活動です。1-2年次のこれらの活動は、まちラボ本郷での授業プロジェクトへとつながれ、大学4年間を通し、その経験は卒業後の就職へとつながっていきます。

来年度は、研究事業を少しずつ充実させながら、まちラボを展開させていきたいと考えております。引き続き、皆様のご協力をお願いしたいところです。今後とも、よろしくお願いいたします。

目次

まちづくりの現代的意義 ～近代化・場所・共同性～	1
まちラボとは	10
まちラボの理念	10
まちラボの目的	10
まちづくり研究センター組織図及び担当教職員	11
まちラボ本郷	12
1. まちラボ本郷の1年	13
1-1. 「場」としてのまちラボ本郷	13
1-2. まちラボ本郷の利用状況	16
1-3. まちラボプロジェクト報告	18
1-4. 授業外のプロジェクト	26
2. まちラボ本郷運営委員より	28
3. 掲載誌等	31
まちラボふじみ野	32
1. まちラボふじみ野のコンセプト、概要、活動内容	33
2. まちラボふじみ野の1年	35
3. まちラボふじみ野運営委員より	40
4. 掲載誌等	43

まちづくりの現代的意義 ～近代化・場所・共同性～

まちづくり研究センター長
古市太郎

Notre devoir envers nous-mêmes, aujourd'hui, est de recréer des lieux qui valent d'y vivre humainement.

- 「私たちの私たち自身に対する義務は、今日、人間的に生きるに値する場所を再創造することである」 (Berque 1995: 116=1996: 131)

目次

1. 近代化という問題：共同性の喪失
2. 投影する自己と等質な空間
3. 関係性として存在する主体と客体
4. 「内面化しつつ外部化する」絶えざる往復運動
5. Projection(企図)：‘われわれ’という同質化
6. Partage(分有)：「われわれ」の露呈・表明
7. 「まち」づくりとは

1. 近代化という問題：共同性の喪失

まちとは何を指すのか。田村(1999)によると、一般的には基礎自治体、つまり、行政区分の市区町村を指す。その根拠は、生活のために必要な上下水を整え、小中学校を整備し、日常のごみを処理し、身近な健康や福祉の窓口になっているからといえよう。

ただし、この意味合いでまちづくりを捉えると、そのまちづくりは一律なものになってしまう。それは、行政の基軸原理が、住民に対しての公平性と平等性であるゆえ、全国津々浦々、同型のまちが形成されていく。

まちづくりは、こうした他の市区町村と同型のまちを形成したいがゆえに、行われるのであろうか。政治的あるいは様々な面において、関西・大阪府が関東・東京都と同じまちになるだろうか。文化的に、京都府と大阪府と神戸市が同じまちになり得ようか。気候面を無視して、札幌市が那覇市と同じにまちを形成できようか。行政区分として合併したからといって、文化あるいは気質がまちとして一体化するのか。答えは否である。ここでは、まちとは、何かしら、自分たちにとって共感があるといわれる。共同のものだという意識が持てて、生活を支えてくれる基礎単位と捉えておこう。

さて、まちづくりの根源的問題に近代化があるといわれる。様々な建造物あるいは都市建設等の事例をあげ、その問題に触れることができるが、語源的に、その根本が見出される。近代化(modernization)とは、mode(現代、今のもの)を作りだすことであり、その「現代性」は、modus(尺度)あるいは model(模型、雛形)に沿って産み出されていく。その尺度元、つまりモデルはどこか。政治的・経済的・文化的・社会的近代化がうまれた「西洋」である。したがって、近代化を推し進めていくことは、西洋に倣って世界各地を西洋化、すなわち均質化(homogenize)させていくことになる。

このことをベルクの表現によると、近代化により世界各地を「己の普遍的空間の合理的ユートピアで置き換えると称して、周囲を取り巻く世界が押し潰されてしまった。近代性は、本質的に、共に住むための新しい動機を作り出すことができない」(Berque 1993: 239=1996: 290)。なぜなら、「それは、世界から動機を奪い、自らも動機づけを失うからである。純粹に物と化され、周囲を取り巻く世界や超自然の世界から独行して、物理的次元だけに還元された世界には、意味の動機づけも、事実、あり得ない」(Berque 1993: 241=1996: 293)。その近代的アプローチが合理的かつ物理的な空間をうみだした。いいかえれば、それは誰のものでも誰のためでもない空間を完成させたことになる。つまり、人間の利便性のために造りだした空間には、人間から地域と共に生きていこうという動機づけが奪われている。

したがって、場所あるいはまちを単なる「モノ」へと還元してしまったことで、環境及び景観の破壊だけでなく、われわれは「生きる意味への動機」あるいは「共にあろうという動機」までもが失われてしまったのである。

2. 投影する自己と等質な空間

ここから、哲学小史を振り返り、このベルクが述べる「場所の再創造」の意義を明らかにしていきたい。

その近代的取り組みに底在する思考枠組みには、人間が対象化し、他方、環境が対象化される図式がある。この図式を哲学原理として明言した最初の人、近世の哲学者であるルネ・デカルトといわれている。

人間が認識する際の確固たる出発点は何か、それが、「コギト・エルゴ・スム(我考えるゆえに我在り)」(Descartes 1637: 32=1967: 188)である。疑わしいものはすべて虚偽であるという立場から、あらゆるものを懐疑し切り捨てていく。しかし、こうして疑い、思惟している我が存在していることだけは疑うことができない。それが「我考えるゆえに我在り」の意味するところである。これを基礎とし、思惟する自己と物体の区別が始まり、精神が物体より先行して存在する理由となる。そして、精神に備わる理性を使うこと、つまり、明証性、分

析、総合、枚挙を経て、誰もが合理的な認識へと向かう(Descartes 1637: 18-19=1967: 177)。これが近代的認識主体の出発点である。

次に、デカルトは「物体」の本性を「延長するもの」と捉えた。精神の本性が見出されたときと同じように、物体の本性を疑い続けた結果、「物体の本性は、重さ、堅さ、色などといったものではなく、ただ延長だけである」(Descartes 1647=1964: 371)、と説く。物体は拡がりあるいはスペースをもつ。この認識に幾何学と代数学が合体し、これまでキリスト教的かつ階層的な自然観による宇宙、天上、地上の「意味づけ」が剥ぎ取られ、それらがみな同じ「等質な空間」として把握される。いいかえれば、宇宙や天上のもつ宗教的意味づけがなくなり、誰もが認識可能で、計測可能な数学的空間がうまれる。

そして、「拡がりある物」(客体)が、「思考する我」(主体)から「図あるいは像」を投影されるだけの物として、主体のたてた目的に対する手段として位置づけられる。それゆえに、人間が図や像を投影し、他方、客体・環境・身体がその図を投影されるという図式がうまれた。

3. 関係性として存在する主体と客体

思惟する主体とその主体から像や目的を投影されるだけの客体という思考枠組みに対し、さまざまな議論や批判の哲学史があるが、ベルクによれば、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』(1927=[1963]1994)、モーリス・メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』(1945=1974)、和辻哲郎の『風土』などが根本的な批判を展開した。彼らには観点の相違があるものの、人間存在を、懐疑主体としてではなく、客体、対象、環境も含めた関係性の中で捉える点では共通している。本稿では、ベルクの風土との兼ね合いから、和辻の『風土』を参照し、その点を論じる。

和辻は、人間存在の構造契機としての風土に着目する。風土とは土地の気候、気象、地味、地形、景観などの総称であり、これが「外に出る(exsistere)こと」、つまり「実存(existence)」の契機となる(和辻 [1943]1979: 12)。いいかえれば、人間は風土を通じて自己を理解する。例えば、人が暑さを感じる時、ただ感覚として暑さだけを感じているのではない。暑さの中へ「投げ出されている」からこそ、自己を見出し理解する。つまり、この風土における自己了解とは、「主観としての我」の理解ではなく、「具体的な身の丈の世界」を理解することである。

まず、暑さの中へと「投げ出されている」われわれ自身、間柄としてのわれわれ自身を見出す。これをよく示す例としては、「日差しが厳しいですね」という夏の暑さの中でなされる挨拶がある。この挨拶には、夏の暑さの中へと共に投げ出されて、一定の存在のあり方を

負うわれわれがあらわれている。暑さを通じて、われわれの間にある実際のつながり、つまり共に存在のあり方を負っていることを、われわれが見出す。

次に風土としての暑さにより、「道具」をわれわれは見出す(和辻 [1943]1979: 23)。「道具」とは「~するためのもの」という目的に対する内在的連関のことである。例えば、帽子は被るためのものであり、鞆は入れるためのものというように、事物は個別に意味を持っている。さらに、暑さを通じて、道具を規定する実際の意味連関を見知る。暑さという文脈において、浴衣、扇子、団扇、縁台、花火などが持つ内在的連関を、われわれは了解する。

最後に、われわれは風土を通じて歴史を了解する(和辻 [1943]1979: 19)。風土が四季の移ろいと関わるからこそ、暑さは自然科学的対象あるいは単なる自然環境ではなく、自己了解の契機となる。つまり、そこで了解される時間は計測可能および直線的な時間ではなく、その土地あるいは地域に循環する「時間」である。

したがって風土における自己了解とは、「主観」から寒さや暑さを対象として感じ理解することではなく、三つの「具体的な我々・事物・時間」を了解することである。それゆえ風土は、主観としての「自己」から図あるいは像を投影される「拡がりある物」ではなく、また主観の目的に対する手段や材料でもない。それは「人間存在の構造の契機」である。

したがって、近代的認識図式からみた環境は、主体から投影されるだけの空間であった。それに対し和辻の視点によると、「拡がりある物」としての環境が風土として捉えられていた。和辻のいう風土は人間存在の構造契機であり、実際、風土を通じた具体的な関係性において自己が存在する。つまり、主体としての人間存在は環境を対象化する側にあるのではなく、主体も客体も関係性の中において存在しうるのだ。

4. 「内面化しつつ外部化する」絶えざる往復運動

このように、和辻は、人間主体から図を投影される客体という「環境に関する近代的認識」に対し、人間主体が環境の関係性の中で存在することを説いた。この和辻の風土論を概ね踏まえながら、ベルクは、人間存在の構造契機である風土を、「自然的であると同時に文化的である。主観的であると同時に客観的である。集団的であると同時に個人的である」(Berque 1986: 148-149=1992: 183-184)と捉え、風土(milieu)の生成過程を論じる。そこで、彼がいう「主観と客観、個人と社会、文化と自然」という三つの次元に沿って、風土の生成過程を考察する。

第1に彼は、人間の世界に対する関わり方から風土を論じ、その関わり方を「*payser* 景化する」と「*habiter* 居住する」とに分ける(Berque 1986: 160=1992: 202)。風土を「景化する」とは、風土をある単位や基準の則し「空間」として扱う関わり方である。例えば、風土の中

の事物を計測し、あるいは数量化し、何㎡などと記号化し、誰にとっても客観的かつ合理的な対象として扱う。

他方、風土に「居住する」関わり方とは、その風土を客観的に捉えるのではなく、内在的に関わることである。つまり、ある場所に根付くことで、その地域住民の間では密接に理解し合えるが、地域外の人々にとっては理解し難い関わり方である。例えば「方言」は、話者自身の土地で育まれてきた言葉とパターンからなるため、他の場所に住む人たちに対して伝達が難しいものとなる。すなわち、その土地に根づいた生活のあり方である。

これらの風土に対する関わり方である「景化」と「居住」は、実際、別々に切り離して存在し得ない。そして、この関わり方を切り離さず結び付けているのが「風土(milieu)」である。さらに、この関わり方の結びつき具合が、その地域に独自性や「趣き(sens)」を生じさせる。

したがって、誰もががある地域に居住することで、地域に投げ出され、地域性に浸っている。同時に、その地域を景化、つまりある観点から客観化してもいる。また、その観点から客観化を試みながら同時に、その観点が地域性に規定され形成されている。この地域に根づきながらも客観化をする「往復運動」が、「通態化」である(Berque 1986: 274-275=1992: 351)。こうした通態化から形成されるゆえ、風土は固定的かつ実体的ではなく、動態的特徴を備える。

第2に、「身体」から風土を論じ、個人と社会に生じる「往復関係」をベルクはみる。彼は、風土(milieu)を身体レベルであらわすとき、それを「風物身体」とよぶ(Berque 2000: 157=2002: 174)。その風物身体は、所与となる「生物学的な身体」に、技術的な身体と象徴的な身体からなる「社会的な身体」が付け加わったものである。商店街の人を例にとってみると、彼らには所与として本能を有する生物学的身体が備わっている。そこに、物質的かつ技術的身体が加わる。もんじゃ焼きの作り方、材料の仕入れ方、商店街での自分の位置づけなど「もんじゃ焼き」を巡る関係が内面化される。さらに、「観念的かつ象徴的身体」が加味される。具体的には、子供の頃から親しみのある食べ物や月島へとアイデンティファイさせるものといった象徴的な意味連関が、彼らに取り込まれる。当然、商店街の人たちの身体は、夫々個人的なものである。しかし、月島が備える意味連関に貫かれているため、彼らの身体には集団性あるいは地域のルールが内面化されている。

このようにみると、第1の「世界への関わり方」と第2の「身体レベル」は重層的関係にある。例えば、「風物身体」と「世界への関わり方」がそうである。その身体には生物学的なものだけでなく、ある社会の集団的かつ象徴的な意味が内面化されている。その内面化とは、地域の慣習やそこでしか通用しないルールを取り込むことである。それゆえ、地域住民は地域に根づいた生活を送れる。この「居住」という生活のあり方を通して、内面化した地

域性を外部化していく。このように、ベルクの風土(milieu)は重層的かつ動態的である。

第3は、文化と自然の往復関係である。つまり、風土(milieu)を備えた人間どうしが相互作用を経て、その風土を外部化し、ある居住領域を形成していく。その居住領域が風土(écoumène)である。この組み合わせの例として、ベルクは「北海道の開拓」をあげる。「いたるところで適応と改革が見られ、新開地と新しい社会が交互に発生した。要するに新しい風土の通態化があったのである。新しい風土は日本と西欧の性質を同時に受け継ぎ(空間構成的ファクター)、それでいて北海道固有のオリジナルなものであった(場所的ファクター)」(Berque 1986: 160=1992: 201)。西欧技術による開拓が北海道という固有の地理的条件に対し、試行錯誤の取り組みから、新たな居住領域を産みだし、同時に、その技術が風土に規定されることで新たな技術となった。

このように、ベルクは「人間存在の構造契機としての風土」が生成するメカニズムを解明した。第1に、彼の捉える風土は、「世界への関わり方」や「身体」という個人レベルでの風土(milieu)とそれが展開される形でうまれる風土(écoumène)からなる。第2に、これらが各々のレベル内で往復関係にあり、さらにレベル間においても相互作用し合うのが特徴である。こうした「主観と客観、個人と社会、文化と自然」という3つの次元での重層的な「往復」により、記憶や生活史が刻まれ、「風土(écoumène)」が産まれる。

こうした重層的な「通態化」が、地域に「意味あるいは趣き(sens)」を醸成させ、人々それぞれにとっての生活実感する範囲が形成されていくのだ。

5. Projection(企図): ‘われわれ’という同質化

これまで、主に、「人と物あるいは空間」について論じてきた。この近代的理性は、共同性のあり方にまで、その性格を反映させている。ベルクは、これを投影的理性(la raison projective)とよび、この理性をもとに、「計画(projet)と進歩(progrès)」を特徴とする近代的文明が産み出されたとしている。

ジョルジュ・バタイユも同様な観点から、近代あるいは西洋に通底する思考を捉える。それを彼は「企図(projection)」とよぶ。「企図」は西洋の伝統的な思考である(Bataille 1953: 60-61, 96=1978: 115, 186-187)。救済、進歩、保存、生産など、西洋または近代の概念にも企図が貫かれている。例えば、「生産」は、ある未来の目的(利益)を基にし、それに合わせて現在を手段化していく思考である。だからこそ、目的に合わないものは排されるか、または合うように変形させられていく。それゆえ、その企図にもとづく共同性は、individualな個人を、ひとつの共同の価値、同質性の名の下に、統合あるいは回収することになる。西洋は、この共同性を絶対的な「目的=終焉」とし、実体化を目指した。つまり、この共同性は、社会的

特質の同質性をもとに、individualな「われ」を、上位の‘われわれ’へと融合・合一させる共同性だといえる。

また、自分と同じ人種、民族といった社会的属性に基づいて、集団を形成する。その結果、属性が同じでないものが排除される。さらに、属性が同じでないものを自分たちの属性に回収することで、自分たちの集団やその価値観を拡張する。

この西洋の根底にあり続ける企図の思考により、共同性が、一つの社会的特質に基づくものであるという単一への幻想が定着していったといえる。このように、企ての思考は、西洋の通奏低音であり、‘われわれ’という同質性による共同性は、西洋に根づく共同のあり方である。

この‘われわれ’が形成される時には、各々が社会的特質では同等であり、コミュニティ内では、何の制限も無い者どうしの完全なる集まりとなっている。だからこそ、各々が社会的同質性を求めるために、各々自身の差異が埋め合わされ、同質性に基づいた‘われわれ’全体という「空気」としての抽象的な集合体が形成される。

6. Partage(分有) : 「われわれ」の露呈・表明

ジャン＝リュック・ナンシーは、企図による共同性と違う共同性を論じる。なぜなら、同質なものと完結・統合しえるということは、「われわれ」という露呈・表明が生じることではないことになる。つまり、最初から共有する社会的同質性が前提とされるならば、「われわれ」や「共にある」という問いは生じえない。だから、ナンシーの共同性において、「われわれ」とは絶えず露呈され、純粹あるいは純潔な同一性や帰属を有した集まり、‘われわれ’を表すのではなく、新たな共同のあり方の出現を表明している、と論じる。

例えば、ナンシーの有限性の自覚は、「生まれる」あるいは「死ぬ」という人間の根源的事実に現れる。「生まれる」は、自分自身で能動性をもって行われる行為ではなく、誰か他の人の助けによってなされ受動的性格を有する。また、死についても同じであり、人間はそもそも自分自身の死を体験することができず、常に他人の死に臨在することしかできない。だから、死は、ハイデガーのように、上位の‘われわれ’、つまり民族共同体を想起させるものではなく、自己完結が不可能な出来事である。死という出来事に臨在し、臨在する者たちは互いの有限性に曝され、‘私と共にあなた’として共に「現れ」ている。したがって、この「共に現れる」ことを、ナンシーは「分有」という。つまり、有限性の自覚を通じて、社会的属性での差異があるが、人間存在のあり方において共有することへ向かう共同性が、partage(分割＝共有)である(Nancy 1999=2001:45-56)。

この合成語は、「握手」をイメージすると分かりやすいだろう。一般的には、握手とは互

いの掌と掌を合わせ、互いの理解を表す行為である。しかしながら、その重なり合いには完全な一致がない。そこには、掌の間には境界線あるいは隙間が生まれている。つまり、分有はこの境界線から共同性を思考し、分離である境界線を通じた結びつきである。

このような有限性の自覚、私「と」あなたという自覚こそが、新たな共同性を見出す。これは、私「と」あなたの並置関係、互いが同じであることを示しているのではない。むしろ、その「と」は、私「と共に」在るあなたという露呈関係を表している。私「と」あなたという表現は、一つの体系、つまり、あるものを意味づける枠組みが、意味づけることができない状況に陥っていることを表している。だから、ナンシーが主張するように、私が存在するには、徹底して他者性に貫かれており、私「と共に」在るため、他の関係を築きうる存在である自身の複数性が、共同性の根幹となる(Nancy 2000=2000:64)。

ナンシーの複数性とは、関係の可能性を開く多様性のことであり、単に価値観の相対化、視点の相対化を意味してはいない。私「と」あなたが意味するのは、‘われわれ’全体という抽象的な集まりへと無媒介に統合されることに対する抵抗である。「われわれ」は、‘われわれ’全体という抽象的な集合体ではなく、ある問題状況に接することで、初めて現れるのである。だからこそ、私自身は単体でありながらも、他の関係を築きえる可能性を持つ多様な存在である(Nancy 1991=2002:71-75)。すなわち、私「と」あなたから成る「われわれ」は、‘われわれ’が、‘彼ら’を想定して初めて成立するのに対し、絶えず、‘われわれ’/‘彼ら’という意味づけへの抵抗として現れる。ナンシーの「われわれ」という表明は、ある一つの意味作用に包摂された互いが、「われわれ」として曝け出し、新たな意味を露呈し、同化作業に対する抵抗のことである(Nancy 1999=2001:63-64)。なぜなら、「われわれ」という表明は、人間の根源的な存在が「共存在」であることの証明であるからだ。

さらに、その表明は、‘彼ら’といった外部に位置づけられたものからの表明だけではなく、‘われわれ’と同質的なものとして位置づけられた側からの表明でもありうる(Nancy 1986=2000:110)。ナンシーの共同性は、「共約可能なもの・‘われわれ’/共約不可能なもの・‘彼ら’」という二項図式を超える試みで、どのように共約不可能なものたちと共同していくのかという点が争点となっている。

7. 「まち」づくりとは

本稿からすると、当研究センターにおける「まち」づくりは、共同性を再生させる場所づくりにつながる。まさに、その共同性は他者を排除せず、ある問題を通じた私「と」あなたからなる。だからこそ、様々な人びとあるいはものにかかれた共同性が可能となるのだ。

こうした近代化への問題意識、その批判からでてきた「場所」の重要性、さらには排他性

を問題とする「共同性」を踏まえているからこそ、当研究センターは、社会問題、特に社会的「距離・不平等・格差」、「社会的格差」でいえば子供貧困や社会的孤立に対し、また「社会的距離」でいえば多文化共生の問題に取り組むことができるのだ。したがって、共約不可能なものたちへの絶えまない共同(性)が、まちづくり研究センターの基本的な理念かつ実践となろう。

【参考文献】

- Bataille, Georges, 1953, *L'Expérience intérieure, Œuvres Complètes V*, Paris : Gallimard.(=1978, 出口裕弘訳『無神学大全 内的体験』現代思潮社.)
- Berque, Augustin, 1986, *Le Sauvage et L'Artifice, Les japonais Devant La Nature*, Paris: Gallimard.(=1992, 篠田勝英訳『風土の日本 自然と文化の通態』ちくま学芸文庫.)
- , 1990, *Médiance de milieu en paysages*, Paris: Belin.(=1994, 三宅京子訳『風土としての地球』筑摩書房.)
- , 1993, *Du geste à la cité-Formes urbaines et lien social au Japon*, Paris: Gallimard.(=1996, 宮原信一・荒木亨訳『都市の日本—所作から共同体へ』筑摩書房.)
- , 1996, *Être Humains sur la terre*, Paris: Gallimard.(=1996, 篠田勝英訳『地球と存在の哲学—環境倫理を越えて』ちくま新書.)
- , 2000, *Écoumène: Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris: Belin.(=2002, 中山元訳『風土学序説—文化をふたたび自然に, 自然をふたたび文化に』ちくま書房.)
- Descartes, René, 1637, *Discours de la Méthode*, Paris: Paris Librairie Philosophique J.vrin 1939.(=1967, 野田又夫訳『方法序説』中央公論社.)
- , 1647, *Les Principes de la philosophie, Euvres de Descartes ; publiées par Charles adam et Paul Tannery*, Paris : J. Vrin.(=1967, 田又夫訳『哲学の原理』中央公論社.)
- Heidegger, Martin, 1927, *Sein und Zeit*, Frankfurt: Vittorio Klostermann. (=1963)1994, 細谷貞雄訳『存在と時間 上・下』ちくま学芸文庫.)
- Merleau-Ponty, Maurice, 1945, *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard.(=1974, 竹内芳郎他訳『知覚の現象学III』みすず書房.)
- Nancy, Jean-Luc, 1986[1999], *La communauté Désœuvrée*, Paris: Christian Bourgois.(=2001, 西谷修・安原伸一朗訳『無為の共同体』以文社.)
- , 1991, *La comparution*. Christian bourgois. Paris.(=2002, 大西雅一郎・松下彩子訳『共出現』松籟社.)
- , 2000, *L'Intrus*. Galilée. Paris.(=2000, 西谷修編訳『侵入者』以文社.)
- 田村明, 1999, 『まちづくりの実践』岩波新書.
- 和辻哲郎, 1979[1943], 『風土—人間学的考察』岩波文庫.

まちラボとは

本学は、これまでも地域や企業、団体などと協働で社会の課題に取り組む産官学連携型学習を行ってきた。「まちづくり研究センター（まちラボ）」は、2019年4月、その成果をふまえ、大学と社会のコラボレーションをさらに活発にするために開設された。

まちラボは、本郷・ふじみ野両キャンパスに拠点があり、本郷では都市型、ふじみ野では郊外型の社会問題に取り組んでいく。学生たちは、キャンパス内では見えてこない実社会の課題に対し、地域や企業、行政の方々と協働しながら取り組んでいく。

本郷キャンパスでは、まちラボプロジェクト演習というプロジェクト型学習を軸に、コミュニティ形成、環境保全、異文化交流など、多様なテーマから課題を選び、理論と実践を相互に学習しながら、新たな社会の形成に必要な社会の仕組みを創造する力を養っていく。

ふじみ野キャンパスでは、課題解決に向けた基礎力（コミュニケーション能力、チーム力など）の育成強化を図る場として、都市－農村交流による過疎地域の活性化、空き家問題、コミュニティの再生、祭事の活性化などの社会問題に取り組んでいく。これらは単位化される科目ではなく、すべてボランティアとしての活動となる。

実社会の課題に連携して取り組み、ともに成長・発展して行くための活動は、本郷キャンパスふじみ野キャンパスの両「まちラボ」で、着実に動き出している。

まちラボの仕組み



まちラボの理念

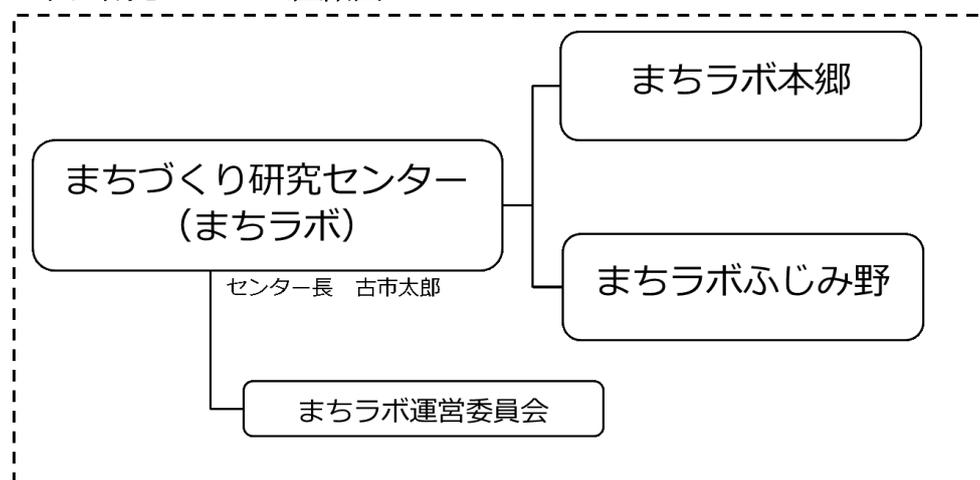
「まちラボ」とは、「まちづくり研究センター」(英語表記名は Social Design Center)の略で、本学の建学の精神「自立と共生」に基づく共生社会の構築を目指す「実験空間」である。この空間は、本学人間学部 コミュニケーション社会学科の基盤となる教育理念を備えた「教育・研究の場（研究所）」でもある。

まちラボの目的

「まちラボ」では社会課題、とくに社会的「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を、学生が主体的に「産・官・学・民」の体制から取り組み、成果を社会に還元していくことを目指していく。

まちづくり研究センター組織図及び担当教職員

まちづくり研究センター組織図



まちラボ本郷運営委員会

センター長：人間学部コミュニケーション社会学科 古市太郎
運営委員：経営学部 新田都志子、外国語学部 芳賀和恵、
人間学部人間福祉学科 青木通
アドバイザー：島田昌和理事長
研究員：森下英美子

まちラボふじみ野運営委員会

副センター長：人間学部コミュニケーション社会学科 中山智晴
運営委員：児童発達学科 菖蒲澤侑、人間福祉学科 田嶋英行、心理学科 文野洋
研究員：岩館豊、磯貝日月
事務担当：渋谷由佳

まちラボ本郷

1. まちラボ本郷の1年

1-1. 「場」としてのまちラボ本郷

まちラボ本郷を「場」として利用する人びと

まちラボ本郷は、「場」としてのあり方を模索する1年であった。あたらしい部屋が「場」として位置づけられるためには、利用者により異なる用途を明確にすることが重要である。

まちラボを「場」として利用するのは、第1には学生である。特にフリースペースとしてのまちラボは、今年度本郷キャンパスに初めてやってきたコミュニケーション社会学科の3年生が対象となり、授業の時間だけでなく、それ以外の時間にも利用したい場として設定されている。学びの場であると同時に、とびきり心地よい場所、サードプレイスとしての位置づけも求められているのである。「場」としては中立であることが望ましいと考えられ、同じ場でありながら、ONの時間もOFFの時間もそこで過ごせる場として環境を整えることが必要となる。

第2には教職員による、教育、会議、イベントの「場」としてのまちラボである。そこに学生が加わる場合もあり、キッチン利用時は、料理に不慣れた学生が一生懸命手を動かす姿が見られた。海外からの留学生が見たことも食べたこともない料理を並べ、試食の列ができたこともあった。



中国からの留学生との餃子づくり

第3に地域の方々との協力の「場」である。今年度の定期的なものは「地域食堂 ほっこり広場」と「地域と大学」会議であった。地域の方々との協力については、今後地域への窓口となるまちラボのあり方を模索、検討しつつ進めていきたいと考えている。

「教育の場」としてのまちラボ本郷

教育の場としては、コミュニケーション社会学科3年生の必修授業「まちラボプロジェクト演習」での利用が軸となる。「まちラボプロジェクト演習」では、社会課題、とくに「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトに取り組むこととなる。2019年度は、コミュニケーション社会学科3年生を対象として、通年で次の6つのプロジェクトに取り組んだ。

1. 携帯電話レアメタル回収プロジェクト
2. ビニール傘回収・リサイクルプロジェクト
3. ねこっちさん（根向千山）ビデオ通信～文京 Deep 那人～プロジェクト
4. 多文化・多世代交流による地域づくりプロジェクト
5. 地域食堂一食を通じたコミュニティづくりプロジェクト
6. 郊外団地・商店街における共生空間づくりプロジェクト

また、まちラボは、ワークショップの多い授業やゼミなどでも部屋が活用された。外部講師を招いたワークショップの後、同じ部屋で昼食会が開催されたり、退職される先生へのお礼として学生が手作りの料理を作る姿も見られた。

ユニークなものとしては、外国語学部の授業「Field Research b」を受講する学生が中心となり、外国人講師に日本食としての手打ちうどんをふるまう「UDON Experience」が開催された。

「学生の居場所」としてのまちラボ本郷

居心地のよい環境づくりのために、テーブルは福島のスギ間伐材で作られたオリジナルのもの、椅子も木製のものが選ばれた。細長いハイテ



まちラボハイテーブル



可動テーブルを囲む学生たち

ブルは、身を乗り出すと思いのほか距離が近く、グループワークにも活用された。組み合わせが可能な扇型の可動テーブルは、その時々で並べかえて使われた。体調の悪い学生のために、ベッドにもなる北欧家具のソファも導入された。

地域の歴史を感じられるのは、奥の部屋にあるキッチンを取り囲むカウンターである。壁に飾られた「呑喜」の看板が、居場所としてのまちラボに地域のどっしりとした趣をもたらしている。「呑喜」は明治時代創業のおでん屋さんであり、地域の名士も知識人も学生も集まって話をするコミュニティの場であったと聞いている。惜しまれつつ閉店となったとき、本学が店の調度品の一部をもらい受けてきてまちラボに設置したものである。まちラボの居心地のよさを、将来的には地域の中に拡大していくことを願った環境づくりとなった。

授業やイベントなどで、決められた組織が決められた空間を利用している時間であれば、空間を占有して自由に使うことができるが、個人の居場所としてのまちラボには、別の課題が待っている。

1つ目は、学生が利用したい時間と開所時間に食い違いが生じる点である。昼食を取る場

として活用している学生にとって、開いていない曜日があることは非常に困ることである。しかし、担当職員が1名しかいないことが、入室できない時間を作り出している。できるだけ早く2人体制となり、学生にも十分な居場所が提供できるまちラボにしたい。

2つ目は、来年度から福祉学科の学生が本郷に移動してくることによる排他性出現の可能性である。排他性が出現するくらい場に対する愛着が生まれることは喜ばしいことであるが、その場を占有するのではなく共有していくステップが必要となる。小さな部屋ではあるが、好んで使うスペースをすみわけるなどして活用し、さらにお互いの情報や相互協力を進める共同性が生まれることを願っている。

「会議室・イベント会場」としてのまちラボ本郷

貸会場としてのまちラボの活用も行われている。会議室としては、毎月の「運営委員会」、
「まちラボプロジェクト演習打合せ」のようなまちラボ運営に係る会議を初めとして、文京区内の行政、企業等と大学の協同を模索する「地域と大学」プロジェクトでは、夜間の会議で活発な議論が交わされている。また、人間福祉学科では、文京区地域包括支援センターとの会議や「CCC (Connect, Create, Challenge) 研究会」による福祉のための商品開発のプレゼンテーションが行われ、他学部とのコラボレーションの可能性も見えてきた。

イベント会場としては、「外部お披露目会」をはじめとして、「新・文明の旅交流会」、「教育改革計画研究グループ」による研究会終了後の懇親会会場などで活用された。

さらに、小児がんサバイバーや障害を越えて大学生となった学生が中心となり、ハンディキャップのある子どもたちが集まれる「ごちゃまぜパーティ」を開催したところ、好評のため定期的を開催する方向へと進んでいる。

1-2. まちラボ本郷の利用状況

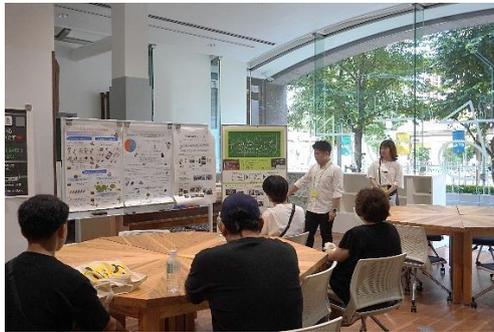
2019年								
日	4. Apr	5. May	6. Jun	7. Jul	8. Aug	9. Sep		
1	月	水	土	芳賀ゼミ	月	木	新田ゼミ まちラボP演習補講	日
2	火	木	日		火	金	地域食堂ほっこり広場 CATV取材	月
3	水	金	月	close: 職員ふじみ野 勤務のため	水	土	オープンキャンパス: まち ラボP演習から参加	火
4	木	土	火		木	日	社会調査実習I・中山ゼミ・ 古市ゼミ・まちラボP演習及 び会議	水
5	金	日	水		金	月	登丸ゼミ メディアリテラシー	木
6	土	月	木	社会調査実習I 中山ゼミ・まちラボP演習 まちラボP演習会議	土	火		金
7	日	火	金		日	水		土
8	月	水	土		月	木		日
	まちラボP会議 家具打合せ							まちラボP演習補講
9	火	木	日		火	金		月
10	水	金	月	close: 職員ふじみ野 勤務のため	水	土	卒業生来訪	火
11	木	土	火		木	日	中山ゼミ・地域と大学 まちラボP演習	水
12	金	日	水		金	月	登丸ゼミ 振替休日	木
13	土	月	木	社会調査実習I 中山ゼミ・まちラボP演習	土	火		金
14	日	火	金		日	水		土
15	月	水	土		月	木	海の日	日
16	火	木	日		火	金	新田ゼミ	月
	ほっこり広場打合せ まちラボP演習 地域と大学会議							敬老の日
17	水	金	月	close: 職員ふじみ野 勤務のため	水	土		火
18	木	土	火		木	日	中山ゼミ・CATV取材 社会調査実習 I	水
19	金	日	水		金	月	登丸ゼミ	木
20	土	月	木	社会調査実習I 中山ゼミ・まちラボP演習	土	火		金
21	日	火	金		日	水		土
22	月	水	土	地域食堂 ほっこり広場	月	木		日
23	火	木	日		火	金		月
	地域食堂会議 まちラボ会議	社会調査実習I まちラボP演習			環境教育論			close: 職員ふじみ野 勤務のため
24	水	金	月	close: 職員ふじみ野 勤務のため	水	土	オープンキャンパス: まち ラボP演習から参加	火
25	木	土	火	まちラボ活用打合せ	木	日		水
	まちラボP演習				中山ゼミ 社会調査実習 I			ランチ会OPEN
26	金	日	水	運営委員会	金	月		木
					登丸ゼミ			中山ゼミ・古市ゼミ まちラボP演習
27	土	月	木	社会調査実習I 中山ゼミ・まちラボP演習	土	火		金
28	日	火	金	登丸ゼミ	日	水		土
						コモンズ社会起業家 フォーラム打合せ		地域食堂 ほっこり広場
29	月	水	土		月	木	倉嶋ゼミ	日
	昭和の日 家具と人の動画撮影							
30	火	木	日		火	金		月
	新田ゼミ	社会調査実習I まちラボP演習						close: 職員ふじみ野 勤務のため
31		金			水	土	登丸ゼミ	

2019年				2020年		
日	10. Oct	11. Nov	12. Dec	1. Jan	2. Feb	3. Mar
1	火	金 登丸ゼミ	日	水 元日	土	日 ハンディキャップを超えたごちやまぜパーティ(延期)
2	水	ランチ会OPEN	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	木	日 入試	月
3	木	中山ゼミ・古市ゼミ まちラボP演習	火	金	月 入試	火
4	金	登丸ゼミ まちラボ規定打合せ	水 close: 職員ふじみ野勤務のため	土 ランチ会OPEN UDON Experience	火	水
5	土	火 新・文明の旅懇親会	木	日	水	木
6	日	水	金	月	木	金
7	月	木 教育実習Ⅱ 古市ゼミ 中山ゼミ まちラボP演習 地域と大学	土	火	金 close	土
8	火	金 登丸ゼミ	日	水	土	日
9	水	土	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	木	日	月
10	木	日 中山ゼミ・まちラボP演習/ 古市ゼミ・ほっこり広場打合せ	火	金	月 close	火
11	金	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	水	土	火	水
12	土	火	木	日	水	木
13	日	水	金	月 成人の日	木	金
14	月	木 教育実習Ⅱ 古市ゼミ 中山ゼミ まちラボP演習	土	火	金 close	土
15	火	金 登丸ゼミ	日	水	土	日
16	水	土	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	木	日	月
17	木	日 中山ゼミ・古市ゼミ まちラボP演習	火	金	月	火
18	金	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	水	土	火	水
19	土	火 文京祭: まちラボP演習 から参加	木 福祉学科 地域包括支援 センター打合せ	日	水	木
20	日	水 文京祭: まちラボP演習 から参加	金	月	木	金 春分の日
21	月	木 close: 職員ふじみ野勤務のため	土 教育実習Ⅱ 古市ゼミ 中山ゼミ まちラボP演習 ほっこり広場打合せ	火	金 close	土
22	火	金	日	水	土	日
23	水	土	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	木	日	月
24	木	日 中山ゼミ・古市ゼミ まちラボP演習	火	金	月	火
25	金	月 close: 職員ふじみ野勤務のため	水	土	火	水
26	土	火	木	日	水	木
27	日	水	金	月	木	金
28	月	木 close: 職員ふじみ野勤務のため	土 教育実習Ⅱ 古市ゼミ 中山ゼミ まちラボP演習	火	金	土
29	火	金	日	水	土	日
30	水	土	月	木	火	月
31	木	日 中山ゼミ まちラボP演習	火	金	土	日

新型コロナウィルス対応のため、イベントは中止または延期要請が出された。

1-3. まちラボプロジェクト報告

【プロジェクト1】金属資源回収プロジェクト



【演習担当】中山智晴 オープンキャンパスにてプロジェクト紹介

【連携先】リーテック株式会社

【プロジェクトメンバー】新垣修一、石川慶司、田渕彩花、遠藤俊弥、藤本くるみ、森晴菜、多田梨紗子、堤愛莉、藤井雅人、松崎皓、三輪昂太

【概要】

昨年度のフィールドプロジェクト演習「金属資源回収プロジェクト」を引き継ぐ形で、今年度は「まちラボプロジェクト」の一環として、リサイクルの知識・意識の向上、および金属リサイクルの促進を目的とした携帯電話の回収活動を行った。

「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」をはじめとする携帯電話と金属リサイクルの回収活動は年々広まりを見せているが、回収後の具体的なリサイクルの流れまでは興味を持ってもらえてはいないという課題がある。そこで本プロジェクトでは一般大学生の携帯回収に意識調査を実施した。その結果約 8 割(85.3%)が携帯電話の中に金属資源があることを認知していた。「機会があったらリサイクルをしてみようと思うか」の質問に対して、全体の約 9 割(94.7%)がはいと答えた。もっと金属リサイクルについて知ってもらうため、その流れを以上のように段階別にわけ、理解し易く視覚化した。

1. 回収：個人情報への漏洩に配慮し、物理的に破壊をしてから回収することが多い。
2. 分別：本体・電池・基盤などに分別され、各リサイクル工場に送られる。
3. 解体：工場にて解体作業と検品が行われ、再利用するためさらに細かく分別される。
4. 破碎：破碎機によって粉々に処理される。
5. 精錬：溶鉱炉に送られて不純物を取り除き、金属の純度を高める。
6. 再利用：新たな電子機器の部品などに再利用される。

本プロジェクトでは、高校生や大学生などの若者を対象として、この 6 段階を「リサイク

ルの流れ」としてイラストなども用いてポスターを作成、イベントで掲示した。これによりリサイクルを主とした様々な資源再生活動への興味・関心の獲得、継続的な回収活動への参加促進へと繋がり、結果として本校の文化祭では昨年度の約4倍にあたる31台の携帯電話を回収することに成功した。また、文京区主催の第19回文京エコリサイクルフェアに提携企業であるリーテック株式会社と協力して出展し、リサイクルに関するクイズや、児童にもそれらの理解を深めてもらえるよう景品等を用意することによって、性別・年齢を問わず多数の人々へ向けて地球環境に配慮した持続的な資源循環型社会の構築とその必要性を訴えた。

本プロジェクトでは、文京祭以降本郷キャンパス内に携帯電話回収告知ポスターを掲示し、まちラボに回収ボックスを常設した。最終的に39台の携帯電話を回収しており、目標であった昨年度回収台数の5倍にまで達している。

【プロジェクト2】ビニール傘回収、リサイクルプロジェクト



オープンキャンパスにて傘アート

【演習担当】 中山智晴

【連携先】 大谷清運株式会社

【プロジェクトメンバー】 小林駿太、岡昇汰、前川天、嶋津悠介、北村毅、武智康祐、府川隼人、佐久間遼介、山田茉美、伊藤和佳子

【概要】

現在海洋プラスチックによって生態系が脅かされるなど、世界でビニール・プラスチックごみの廃棄について問題となっている。そこで、本プロジェクトは身近な生活用品としてビニール傘のリサイクルに着目し、廃棄されるビニール傘の削減を目的とした。

まずは、学内の大学生を対象にビニール傘の廃棄に対する意識調査を実施した。この調査から、どうしてビニール傘は捨てられてしまうのか、また、どのような工夫をすれば捨てられにくくなるのかなどの基礎データを取得した。次に、消費社会の改善に向けて地域住民や

学生が廃棄行動を起こさないように啓蒙活動を実施した。具体的には、文京エコリサイクルフェアや文化祭においてビニール傘廃棄・回収に対しての意識を改善し、より効果的な回収・リサイクルの方法を地域の方などと一緒に考える場を作った。また、街中に廃棄されているビニール傘の撮影、回収を進め、捨てられやすい場所の環境などを調査した。

2つの活動を終えて、最後に全体の報告会に向けてパワーポイントの作成・報告書の作成を進めてきた。メンバーで担当を振り分けして当日に向けて準備や練習を実施した。

なお、このような取り組みは国内で継続的に実施されたことはなく初の取り組みであるため、回収したビニール傘をどのようにリサイクルするかは、連携先の大谷清運株式会社と検討中である。現時点で有力な方法は、大谷清運株式会社が得意とする廃プラスチックの固形燃料化としてのリサイクルである。燃やして廃棄するビニールを逆に燃料として再利用するというもので、現在、会社内で検討が進められている。

この1年間、ビニール傘の廃棄が環境へ与える影響、廃棄される傘が膨大な数であること、回収されリサイクルされる傘はほとんどないことなど、自分たちが初めて理解することが多くあった。ここで得た知識を地域の方々や大学生に知ってもらい、一人でも多くの方が興味・関心を持つことがまずは大切であることが明らかになった。

具体的には、以下に示すようなことが明らかとなった。

- ・ビニール傘をリサイクルできることを知っている人が予想以上に少なかったが、文京祭やエコリサイクルフェアを通して、多くの人に廃棄ビニール傘の環境への影響を理解してもらった。リサイクルを進める大学生の本活動を認知してもらうことができたことで、多くの方々にリサイクルの意識を持ってもらえた。

- ・町には不要なビニール傘が多くあった。写真集を制作して明らかとなったが、電車での忘れ物、可燃ごみとして捨てられているもの、空き地などに放置されたものが多いことが明らかとなった。このような場所にポスターを貼ることは、ポイ捨てを減らすのに一定の効果があるだろう。

- ・回収本数を上げることが思ったより難しかった。周知方法の再検討が必要である。

- ・一からプロジェクトを進めていくのが大変だった。前例もなくビニール傘回収が行われていることを知らない状態だったので、まずは自分たちが知ることから始まった。プロジェクトを始めるにはまずは自分たちの理解を深めることが大切であることが分かった。

【プロジェクト3】ねこっちゃんビデオ通信～文京 Deep な人



ねこっちゃんキャラクター

【演習担当】坂口博樹

【連携先】地域連携ステーション フミコム 有限会社 岩夢

【プロジェクトメンバー】五十嵐祐介、岩田千夏、高野凌雅、田中利奈、大久保春輝、岡花脩人、加賀美李歩、菅野源貴、鶴間海智、山崎隼汰、吉田健人

【概要】

本プロジェクトでは、学生が根津、向丘、千駄木、白山（ねこっちゃん）＋本郷、弥生地区の人々と関わり、地域のことを知り、そこに住むキーマンや面白い人をビデオで紹介する映像コンテンツ制作をしている。基本的な撮影技術を身につけてからは、10～15分のショートムービーを月1本制作することを目指した。

地域に根ざして暮らす人や活動する人に、地域の歴史や思い出、今の生活や活動、街の現状、街についての思いなどを忌憚なく語っていただき、それを撮影する。ゲストによって地域をさまざまな視点から取り上げ、リアルな感覚を視聴者に伝えたいと思っている。

また、地域の人に語ってもらうことを記録することで、アーカイブとして残せる作品作りを目標としている。

2019年度は、

- ・白山上向丘商店街振興組合の方々のお話
- ・白山祭り
- ・根津神社例大祭
- ・文京区の子育て支援活動する女性二人のお話
- ・弥生地区の喫茶店「夢境喜茶」女性オーナーさんのお話

の5作品を制作した。

またこの5作品を15分の1作にまとめて、文京映画祭に出品する。

第5回 文京映画祭

2020年3月7日（土） 文化シャッター2階B Xホール（文京区西片 1-17-3）

<http://www.bunkyoegasai.jp/>

※残念ながら、文京映画祭は、新型コロナウイルス感染予防のため中止となりました。

【プロジェクト4】多文化・多世代交流による地域づくり



まちラボプロジェクト演習報告会にて

【演習担当】 小林宏美

【連携先】 NPO 法人さいたまユースサポートネット、さいたま市若者自立支援ルーム

【プロジェクトメンバー】 西村咲璃、甲斐ナオミ、佐々木光、鈴木穂乃香、西尾杏奈、福田哲、盛島宗悟、廣島環、矢川美乃里、中村渉

【概要】

日本社会には様々な困難を抱えた子ども・若者が多く存在する。文部科学省の調査によると、2017年度の不登校の児童・生徒数は14万4,031人で過去最高を記録した。また、内閣府によると、15歳～39歳のひきこもりの推計値は2015年調査で54.1万人であった（子供・若者白書2019）。さらに、日本の子どもの7人に1人は貧困状態にあると言われ、経済的理由で就学援助を受けている小学生・中学生の割合は政府の貧困対策により減少傾向にあるものの、7人に1人程度で高止まりしている（子供・若者白書2019）。

困難な状況に置かれた子ども・若者を対象に公的機関や民間団体などが様々な支援を行っているが、本プロジェクトの目的は、プロジェクトの活動を通して引きこもりや不登校で悩みを抱えた若者に、他人と交流することの楽しさを少しでも経験してもらいた

い、そのためのきっかけ作りに大学生という立場で協力したいということであった。そこで“地域の居場所”となることを使命として、さいたま市を拠点に居場所がなく未来への不安を抱えた子ども・若者を支援している NPO 法人「さいたまユースサポートネット」と連携共働することとなった。

「さいたまユースサポートネット」は7つの事業を展開しており、それぞれ支援の対象者や活動内容が異なる。前期は連携先は決定していたものの、企画段階で具体的にどの事業に関わるかなかなか定まらず、プロジェクトが思うように進展しなかった点が反省点であった。第1回目の企画案が実現できたのは、9月5日のドッジボール大会であったが、本プロジェクトの趣旨が、連携先の利用者と学生の相互理解と交流にあるため、お互いにコミュニケーションがとれるよう混成チームを組み試合を行った。だが、この日がお互いにはじめて顔を合わす場となったため、お互いの距離を縮めるところまではいかなかった。

前期の反省点を踏まえ、後期は学生のアルバイトの事情を勘案しつつ、早い段階から後期の全体スケジュールを立ててそれをこまめに学生たちと共有することを心がけた。その甲斐もあり、学生たちが安心してプロジェクトに参加できていたようだ。後期は学生たちが連携先施設を訪問して利用者の普段の活動の様子を見学したり、一緒に活動に参加する機会を持ち、そのことで多少なりとも利用者に対する理解が深まったようだ。連携先利用者と直接触れあう機会を増やしていくことで、利用者に対する学生の思い込みを払拭することができ、後期のメインイベントであった「たこ焼きパーティ」はお互いの距離も大分縮まり、楽しい交流をすることができ盛況のうちに終了することができた。

【プロジェクト5】地域食堂 一食を通じたコミュニティづくり



地域食堂ほっこり広場にて地域の方々と語る学生

【演習担当】 古市太郎

【連携先】 ほっこり広場実行委員会 文京区社会福祉協議会

【プロジェクトメンバー】 石川翔悟、小林伶、富田大貴、林浩太郎、宮本達彦、栗谷川はるか、早川知輝、宮本理央、齋藤舞、中村志穂

【概要】

<背景と目的>

社会構造や環境の変化、住民の地域社会への帰属意識の希薄化などにより、地域住民同士の交流が減少しているといわれている。こうした背景と社会福祉法人武蔵野会『リアン文京』への視察を踏まえ、「地域ネットワークの再生」のために、地域食堂「ほっこり広場」に取り掛かった。つまり、地域食堂が一つの有効策になるのではないかということだ。「ほっこり広場」は地域住民からなる実行委員会形式で進められ、文京区社会福祉協議会のアドバイスも受けている。そして、この取り組みの意義あるいは利用者の状況などを実証するために、アンケート調査を実施している。

<開催日と内容>

第1回 6月22日「すいとん」

第2回 8月2日「パンケーキ」

第3回 9月28日「おはぎ」

第4回 11月2日「スイーツタルト・スイートポテト」

第5回 11月30日「ランチ会（カレーライス）」

第6回 12月21日「クリスマス会（ガトーショコラ）」

第7回 2月6日「予行練習」

第8回 2月8日(予定)「感謝祭・豚汁&おにぎり」

<開催曜日と時間帯>

基本、土曜日で、通常時間帯は 14:30～16:30、ランチ会が 12:30～14:30 で実施。

<開催場所>

まちラボ本郷

<参加者>

平均して、30名弱

<成果>

実際の利用者の層は、70歳以上の女性が多く、開催していくにつれ、お子様連れも多くなってきた、また、利用者のリピーターが多く、口コミで彼らが友人を誘う形となっていた。さらに、文京幼稚園や町会のみなさまのご協力もあり、掲示板や町会新聞などで紹介し

てくださった。総じて、「ほっこり広場」を一つの契機にして、向丘地区にひとつのつながりが形成される契機をもたらしているといえよう。

【プロジェクト6】郊外団地・商店街における共生空間づくり



まちラボプロジェクト演習報告会にて

【演習担当】岩舘豊

【連携先】みさと団地南地区コミュニティ広場 2019 実行委員会ほか

【プロジェクトメンバー】安井萌加、穴井美帆、加藤愛望、千種亜実、土屋侑生、名佐原啓輔、宗像里歩、渡辺宗樹、岡山杏、小林玲央

【概要】

今年度は、「郊外団地・商店街における共生空間づくり」プロジェクトとして、埼玉県三郷市にあるみさと団地・商店街での地域イベントに参加した。1年目の今年度は、団地や団地商店街にある既存の活動や団体との連携を図りながら、夏祭りやハロウィンイベントといった地域イベントについて、学生たちが自ら出店企画を考え、実行した。そして、イベントに実際に関わることを通じて、まちづくりに不可欠な地域イベント運営や出店の経験を得るとともに、団地や団地商店街の現実や課題を把握し、解決の糸口を見出すことを目指した。

学生たちが発案してくれた出店企画はいずれも好評であり、水でっぼう射的、ボディシール、ネイルはいずれも、地域の子どもたちが多く参加してくれた。夏祭りでは、学生たちの出店した屋台が途中から子どもたちに「占拠」されるなど、イベント内に子どもたちの笑顔とその熱気を生み出し、賑わいの創出に寄与することができたのは、本プロジェクトの大きな「成果」である。また、気候に左右される野外イベントでの出店や運営について、ノウハウを得られたことも収穫であった。そして、事前の打ち合わせや当日の活動を通じて、NPOや自治会や商店街組合としてまちづくりに取り組んでいる「先輩」の熱意や工夫にじかに触れられたことが、これから学生たちが地域社会の理解を深め、そこで活動していくうえで意義があることだったと思う。

科目担当者としては、初めて担当するということもあり、試行錯誤の連続だった。作業の割り振りなどプロジェクト全体のオーガナイズについて、教員としてうまくサポートできなかった点は、今後の改善につなげていきたいと思う。商店街という野外での活動ということで、夏祭りは酷暑のなか、秋のハロウィンでは寒さのなか、学生の皆さんはよく頑張ってくれた。おつかれさまでした！最後に、みさと団地と団地商店街の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

1-4. 授業外のプロジェクト

都市部活性化事業：東京都文京区産学官連携プロジェクト

【担当】 中山智晴

【連携先】 中小企業同友会文京支部、アドバイザー（文京区区民部経済課）、経営学部（馬渡、新田先生とゼミ生）

【概要】

本年度5回実施された「地域と大学」ワークショップにおいて、文京区内の大学生が地域に愛着を持ち、大学生が創造する新しいまちを創造することを目的に実施されている。参加者間で「地域の企業と大学」の連携活動を模索する中、大きく3つ「地域活性化」「商品開発」そして「学び・交流の場づくり」に分類された。具体的には以下のような活動案が提案された。

1. SDGsの理念のもと、文京区を中心とした廃棄物の回収・処理（リサイクル）に取り組みたい。具体的には、まずは使い捨てビニール傘にターゲットを絞る。
2. 企業と学生がタイアップした文京区をPRする新商品を開発する。
3. 空き店舗を活用した学生交流カフェ、高齢者向けカフェを企画・運営する。
4. 区内で実施されている祭礼の活性化、神社仏閣を巡るスタンプラリーを学生と連携し模索する。
5. 小学生の放課後の遊びや下校時の安全見守り活動を実施する。

産学官連携でのまちづくり活動に焦点を当て、第3回は文京区民経済課を交え、前回までの案を土台に具体化を図った。参加者の意見を要約すると、その結果以下のように変更された。

文京区内の空き店舗を活用し、学生主体の社会実験的コミュニティビジネスの開発を実施していく。

段階としては以下のようなものである。

<ホップ>

学生企画案をまちラボ本郷の空間を利用し仮想店舗運営の体験を行う。たとえば、

- 鹿児島の大島紬着物の PR、試着体験会など
 - 廃棄されるビニール傘の効果的回収、捨てられない傘を制作するアイデア募集する場
 - 高齢者・大学生交流・異文化体験カフェの模擬営業
 - 小学生の放課後遊びの場（駄菓子屋など）の開設
- などを一定期間実施し課題等を見出す。

<ステップ>

ホップ段階で得られた課題等を改善し社会的活動が展開可能と判断されたプロジェクトは、文京区や関連団体（まちづくり NPO など）のアドバイスを受け実営業可能かの審査を受ける。採択された活動は、文京区と連携しチャレンジショップ制度にて一定期間実社会においてコミュニティビジネスを運営する。学生は店舗経営（仕入れ方法や経理などなど）のノウハウを店舗経営者等から指導を受ける。採択された複数プロジェクトは日程を調整しチャレンジショップを活用する。

<ジャンプ>

ステップ段階で独立営業が可能と判断された事業は、空き店舗を賃借し実営業に移行する。チャレンジショップとは異なり家賃等収益から支払うこととなる。

<最終形 夢>

ジャンプ段階を経た事業を卒業後も運営する学生（起業家）が出始めてきたとすると、商店街の空き店舗が少しずつ若い経営者のコミュニティビジネスの聖地へと変貌してくる。地元文京区で学んだ学生が地元の方々の協力を得て地元で恩返しする地産地消型まちづくりへとつながっていくことが期待される。

2. まちラボ本郷運営委員より

“まちラボ”の準備と始動

理事長 島田昌和

“まちラボ”という新たな空間を創出するために随分とエネルギーを費やしたように感じる。それは普段、意外と外部とは分断された大学に学生と地域を繋ぐ空間を用意するというのはなかなかイメージがわかなかつたからであろう。地域の人にとって思わず立ち寄りたくなる空間とは何だろうと先行事例を見学した。どこもいろいろな苦労があることもわかった。関わったメンバーの思いが様々に交錯し、最後に集約されて“まちラボ”はできあがった。

3年生から本郷に移ってきたコミュニケーション社会学科の学生がおずおずと集まって大事な居場所となった。香り高い木製の大きなハイテーブルが学生を引きつけたのは望外の喜びであった。多用途に使えるキッチンがこれまで学内になく、じわじわとその効用を学内に広めつつある。“呑菘”という昔ながらのおでんやの看板やカウンターが地域や大学人にとっての大事なアクセントとなったことも、交渉して一式を譲り受けた身として大いなる喜びであった。



呑菘の看板とカウンター

学生の学びの場として、いくつもの授業が展開し始めている。その中で外部とのコラボレーションで手慣れた地域の方々に混じって、戸惑いながら立ち働いている学生の姿がだんだんと板についてきているのもこの空間が少しずつだが、動き出している事を実感させてくれている。

緑の多い本郷通りを大きなガラス面越しに外光と共に感じられるこの“まちラボ”がさらに一層、地域と大学、とりわけ学生の交流の舞台として多様に利用されるよう、始動の年から次のステップの年につなげたいものである。

まちラボの運営に参加して

経営学部 新田都志子

本郷にまちラボが誕生して約1年。まずは人間学部コミュニケーション社会学科3年生の本郷での学びの拠点としての役割として発足したように思う。経営学部教員としてはあまり力になれたわけではないが、「社会の課題を解決する」という同じような研究コンセプトでゼミを運営していることもあり、1年目はどのようなプロジェクトが展開されるのか、学生たちの学びは経営学部とどう違うのかなど興味深く観察させていただいた。

もちろん自身のゼミナールでも利用した。3年生に編入してきた中国人留学生の歓迎とし

て餃子やお好み焼き、手巻き寿司などをゼミ生と一緒に作って食べたのだが、買い物の準備、下ごしらえ、調理、食事、片付けと全員一緒に行くことでチームワークも良くなったと感じ、このような使い方もキッチンが備え付けられており、木のぬくもりを感じさせるテーブルを配置したまちラボならではと感じた。学生たちは居心地が良かったようでゼミの活動拠点としてたびたび利用しているようだ。

正直、この運営に関わるまで同じ大学で働いているにも関わらず、まちラボの前身「環境教育センター」という存在も存じ上げなかった。そのため最初の準備の段階で当たり前に話されていることを全く理解できていなかった。今思えば相当失礼なことを言っていたのではないかと思う。

その後学内全体の「地域連携・社会貢献」について執筆する機会があり、このまちラボでの経験が大いに役立った。そして他学部が行っていることをそれぞれがいかに関心がないかにも気づかされた。本郷、ふじみ野で教職員や学生たちが行っている様々な社会的な活動は驚くほど多岐に亘り、かつ非常に有意義なものが多い。少し視点を変えればさらに発展すると思われるものもあるし、組み合わせることでより有効性を感じるものもある。この1年を通じて最も考えたのはこの「まちラボ」が将来的には各活動を有機的に結びつけられる「ハブ」の役割を担えないだろうかということである。

来年度は経営学部のプロジェクトもスタートする。まずは各学部単位で一歩ずつだがいずれそれらが結合し、大学として地域や社会へ貢献できる場となって欲しいと考えている。

まちラボ運営委員として

人間福祉学科 青木 通

準備委員会から継続して運営委員として携わっているが、どのような役割を果たすことができるのかについては、いつも自問自答しながら時間だけは過ぎてきた。ただ、2020年度以降の方向性として「教育」「活動」「研究」という3つの柱を推進していくことを確認することができ、本来の運営委員としての役割と同時にプロジェクトを実践することについても気持ちが向かい始めるようになった。人間福祉学科に所属する教員であり、「福祉」は「まちづくり」とは切り離すことができない領域と考えている。また、大学には外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部それぞれの強みがあり、これらを有機的に結びつけ、学部学科横断型で「まちづくり」をしていくことは、地域に大きな貢献ができると思う。加えて、2020年度は人間福祉学科福祉マネジメントコース1期生が3年次から本郷キャンパスでの学びを始める。このまちラボが福祉マネジメント学生にとって多様な経験値を蓄積するフィールドにすることができれば、センターの意義も広がりとおもしろさをもってくると思われる。今後はセンターを拠点としたさまざまな動きが出てくることになるので、その動きに乗り遅れないこと、的確な判断や提案ができるように活動していきたいと考えている。

「まちラボ本郷」立ち上げに関わる中での期待

外国語学部 芳賀和恵

学部横断型の「まちラボ」というプロジェクトの立ち上げに、私は外国語学部からのメンバーとして関わってきた。これまで、学際的に研究者とかかわる経験をしているものの、教育と研究を包括的に、かつ、学部横断型で行う組織のイメージを持つことは、簡単ではなかった。「まちラボ本郷」立ち上げ準備期間を通して積み重ねられた対話によって、イメージが形づくられていった。その過程は刺激的なものであった。「まちラボ本郷」は自己生成的に成り立ち、今後も自己生成的に発展していくと感じる。

「まちラボ」は「まちづくり」の一点で、様々な領域の人々と様々な仕事とが交差する場である。「まちラボ」で行われるべき教育や研究、プロジェクトの検討以外にも、ロゴや什器のデザインと材質の選定も、「まちラボ」立ち上げの大切な要素であった。その成果として、思わず「居心地がよい」と感想が出る空間が誕生した。

地域とのコラボレーションをする上で、「居心地がよい」と思える場所があることは、大切な前提条件であろう。今年度から、「まちラボ」空間で授業やその他の活動が始まっている。「まちラボ本郷」立ち上げ準備期間と同じように、多様な人々とのコラボレーションが積み重なることで、「まちラボ本郷」の空間も内容も、自己生成的に形作られていくと思われる。なにが生まれるかわからないが、面白いものが生まれる予感がするというのは、魅力的なことである。

「まちラボ本郷」で成長を見せる学生たち

まちラボ研究員 森下英美子

まちラボに常にいる人間として1年関わり、学生の変化を最も間近に見てきた。初めてまちラボ見学に来た時、知っている顔がいるだけで、学生たちの緊張した表情が和らいだ。まちラボプロジェクト演習の授業等でまちラボになじんでくるにつれ、まちラボで昼食をとる学生が増えてきた。こうして、居場所すなわち学内サードプレイスとしてのまちラボ活用が始まった。

授業の空き時間に何となくいる学生、奥の部屋の灯を消して居眠りを決め込む学生、パソコンを借りて課題に取り組む学生、研究員の机のそばに座って話し込む学生、多種多様な居場所としてまちラボが使われていく。やがて、プロジェクトの進め方を相談に来たり、レポートの相談、個人的な悩み事を話していく学生も出てきた。可能な範囲で対応し、最終的には担当の先生に相談することを勧める。そんなことも仕事のひとつとなった。

大きくか小さくかはわからないが、1年間見ていると学生は確実に成長している。しかし

ながら、自己肯定感が低いのか、本人はそれに気づいていないことが多い。うまくいかなかったことに気を取られすぎているようだ。そこで、できるだけ直接、「これができるようになったのでは?」「まちラボプロジェクトの成果でここがすごいということに気づいてる?」などと言うように心がけている。

将来に希望が持てない若者が増えているらしい。大きな希望が持てなくても、小さく着実な1歩を振り返ることはできる。そんなことも、まちラボのこの環境だから気づくことができるのかもしれない。

3. 掲載誌等

<新聞>

- 2019年4月12日 『日刊木材新聞』 「地域交流拠点へ福島産杉導入 伐採から加工まで動画でたどる 文京学院大学」
- 2019年5月30日 『文京経済新聞』 「文京学院大学にまちづくり研究センター「まちラボ」 お披露目会で在学生在が提案発表」
- 2019年9月13日 『日刊木材新聞』 「新拠点披露で杉製家具話題に 制作過程動画をホームページで公開 文京学院大学」

<テレビ>

- 2019年10月7日(月)から10月13日(日)、10月21日(月)~10月27日(日)『文京区民チャンネル』 「スマイルライフ 文京学院大学 まちラボのご紹介」



CATV 取材風景

<その他>

- 2019年5月28日 まちラボ家具制作ショートムービー「まちラボがつなぐ、木と人の物語 ースギのテーブルがはこんでくれたものー」完成

まちラボふじみ野

1. まちラボふじみ野のコンセプト、概要、活動内容

【まちラボふじみ野のコンセプト】

まちラボは、本学の「自立と共生」の理念に基づく共生社会の構築を目指す「実験空間」であり、まちラボふじみ野は、主に運営する人間学部コミュニケーション社会学科の基盤となる教育理念も取り入れた「教育・研究の場（研究所）」である。共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を学生主体の下で展開し、教員や学外の関連団体がサポートする体制で社会問題の改善に取り組み、その成果を社会に還元していくことをコンセプトとしている。

まちラボふじみ野は研究所であり、本学科学生、教員が研究員として参画するのみならず、「共生社会の創造」を共に目指す他学部他学科教員・学生、そして、まちづくりプロジェクトを共に進めていく行政、企業、NGO・NPO などの方々が所属する組織である。そして協働体制を組織化することで、社会問題に対峙する課題解決型の活動集団を目指している。

【まちラボふじみ野の概要】

まちラボふじみ野は、現状ではふじみ野キャンパスの人間学部コミュニケーション社会学科1，2年生を中心としたラボだが、今後は学部学科横断的な組織へと広がり共生社会の創造を図っていくこととなる。

まちラボ本郷が都市型社会の問題を対象とするのに対し、まちラボふじみ野は都市近郊・地方の社会問題の解決を目指し、埼玉県ふじみ野市や福島県郡山市などの行政や企業、NPOなどと連携し「共生社会（都市近郊・地方）の創造活動」を進めるうえでの基礎を学んでいく。すなわち、課題解決に向けた基礎力（コミュニケーション能力、チーム力など）の育成強化を図る場である。具体的には、都市－農村交流による過疎地域の活性化、空き家問題、コミュニティの再生、祭事の活性化などの社会問題に取り組んでいる。これらは単位化される科目ではなく、すべてボランティアベースの活動である。

【まちラボふじみ野の学生教育ポリシー】

コミュニケーション社会学科のアドミッションポリシーである、

- ・主体的に行動しようとする意欲
- ・多角的な視点から考察できる力
- ・異質な集団をまとめるリーダーシップやコーディネート力

を基盤に、まちラボふじみ野に所属する学生に学力の3要素を早期に養わせようとするものである。その教育ポリシーは以下のようなステップで実施されていく。

①森を知る。

社会問題の全容を理解する。

②木を理解する。

全容を理解するため、住民や顧客一人ひとりの声を聞く。

③森の地図を描く。

社会の抱える複雑な問題のつながりを整理する。

④森の抱える一番の問題を見出す。

取り組むべき課題を絞り込む。

⑤目的地へ到達するルートを考える。

地域の未来を切り拓くアイデアを構想する。

⑥道をつくる。

実現に向けた事業モデルを検討する。

⑦仲間を集める。

実現に向けて住民・事業者を巻き込み、地域を動かす組織をつくっていく。この時、住民、事業者、行政など双方向に協働し価値を創造する（共創）仕組み作りを経験することが重要であると考えている。

まちラボふじみ野の活動で培われた経験は、まちラボ本郷での活動へとつながれていき、大学4年間を通し、その経験を卒業後の就職へとつなぐことも大きな目的の一つである。

【ふじみ野から本郷へ】

まちラボふじみ野では、特に1, 2年生という年代の学生に新しい社会的価値を創造するための革新的なアイデアを創造する基礎力を育成し、アイデアを実践していく組織づくり等を学ぶ場を目指している。そして、ここで学んだ学生は3, 4年生でまちラボ本郷に移動し、都市型社会問題の解決を目指し、そこで必要となる実践力のみならず理論的背景も同時に学んでいく。

まちラボふじみ野では、問題化しつつある以下に示すような新たな「社会の問題」

- 過疎高齢化、コミュニティ崩壊、空き家問題・・・
- 貧困・社会的弱者、格差社会、食の安全保障、環境破壊・・・

を主たる対象とし、最終的には「社会」の抱える複雑な課題解決に挑戦し、社会貢献しうる専門性の高い教育・人材に育てていく。

【まちラボふじみ野のプロジェクト概要】

現在、「郊外型社会づくり」と「農村活性化」の2つのプロジェクトを実施している。詳細は後述するが、大別すると以下の様になる。

1. 郊外まちづくりプロジェクト

○商店街の空き店舗を活用した地域コミュニティづくり

【連携先】大井ショッピングセンター商店会、亀居銀座商店会、埼玉県ふじみ野市役所、埼玉県

2. 農村地域活性化プロジェクト

○都市—農村交流の推進による農村・農業の活性化

【連携先】福島県郡山市役所、逢瀬いなか体験交流協議会、埼玉県立ふじみ野高校、福島大学農学類

2. まちラボふじみ野の1年

まちラボふじみ野の活動は、大きく「農村地域活性化事業」と「郊外まちづくり事業」の2つがある。以下で、それぞれの活動の1年間を振り返る。

【農村地域活性化事業】

(1) 福島県郡山市逢瀬町との都市-農村交流プロジェクト

第1回目のスタディツアーを7月13-14日に実施した。まちラボふじみ野学生研究員+ふじみ野高校生徒会・教諭が参加し、地域おこしのための地域資源発掘ワークショップなどを実施した。第2回目は2020年2月に「福島みらい会議」を地元の福島大学農学類の研究室と合同で実施する。

【連携先】

埼玉県立ふじみ野高校、福島大学農学群、逢瀬いなか体験交流協議会

(2) 「農」と里山シンポジウム

9月14日、文京学院大学にて開催された。農村や農業を支えていく次世代の担い手に関するシンポジウムに、コミ社卒業生で農業・農村に関わる2名が登壇した。参加者210名。

(主催) 埼玉県農林部、川越農林振興センター
(後援) 西武鉄道



農業に携わる卒業生が登壇

【郊外まちづくり事業】

(1) ふじみ野商店街空き店舗活用

岩館研究員と学生研究員が中心となり、夏休み中に大井ショッピング商店会内にある空き店舗「旧・信濃屋」の片付けを始め、居場所づくり（駄菓子屋）開店のための準備を進めた。12月には、仮営業に至っている。多くの子どもや親が買いに来てくださり、大学生との交流を楽しんでいる。また、同商店街の空き店舗「旧・銀貝堂」から店舗使用の話が来ているため、二号店を開店するか否かも含め打ち合わせを開始している。

【連携先】

大井ショッピング商店会、亀居銀座商店街、埼玉県産業労働部、埼玉県ふじみ野市市民活

動推進部

【活動概要】

空き店舗を活用した地域の居場所づくり「菓子屋ぶんぶん」の学生運営企画を進めている。昨年度から埼玉県助成事業「NEXT 商店街プロジェクト」に学生たちは参画し、地元住民や商店街の店主などと3回にわたるワークショップを重ねてきた。その中で、高齢者も子どもたちも集まれる場づくりが必要との結論に至り、その後、本事業は埼玉県からまちラボふじみ野に移譲され現在に至っている。空き店舗を借りることができ、掃除や内装工事などの期間を経て、試験的運用を開始している。

【助成金】

株式会社タウンマネジメント



菓子屋「ぶんぶん」仮営業開始

(2) ウィークエンドフォーラム

6月29日にふじみ野キャンパスで開催された「定年後の移住と田舎暮らし」に磯貝研究員の指揮のもと運営委員の田嶋先生、岩館研究員、中山、卒業生がパネリストとして登壇した。

(3) 吉商本舗視察出張

岩館研究員が、空き店舗活用・地域活性化の先行事例として、静岡県富士市へ視察に行った。高校が空き店舗を活用して運営する駄菓子屋であり、運営方法等について聞き取りを行った。

(4) 鎌倉フィールドトリップ(地域づくり研究)

7月6日、7月21日に鎌倉にて実施された。学生研究員と磯貝研究員が参加した。先進的

なまちづくりに挑む鎌倉の商店街や街並みを散策することで、文化と産業の両立を図り進めている具体的な取り組み内容を学んできた。

(5) まちラボ野外会議

7月30日に第1回野外会議が開催された。五反田地域でまちづくりを実践する有識者、NPO関係者とのワークショップに人間福祉学科やコミ社の学生研究員が参加した。空き店舗を活用した地域活性に取り組む次世代の精鋭が多数集まってくださり、学生と夜遅くまで話し合いが続いた。

(6) あやめ祭 (2019年10月19-20日)

福島・逢瀬町の野菜販売とふじみ野の商店街のおでんと焼き鳥を出店する。在校生に地域理解を深める一環としての活動である。商店街商品の販売はコミュニケーション社会学科2年生を中心に、逢瀬町野菜販売は児童発達学科4年生を中心に実施された。

【連携先】

逢瀬いなか体験交流協議会、大井ショッピング商店会

【活動概要】

まちラボふじみ野が取り組んでいる農村活性化事業及び郊外活性化事業について、その成果や展望を連携先と確認するとともに、文京学院大学ふじみ野キャンパス内で周知、普及することを目的に、あやめ祭において出店をした。逢瀬町で栽培された野菜販売と、大井ショッピング商店会内店舗のおでんと焼き鳥の販売を行った。商品提供元との連携は学生研究員と教員研究員が協力して取り組み、当日の販売及び在校生、教職員、来場者への周知は学生研究員が中心となり行った。この活動を通して、春から夏にかけての連携について、秋以降、また来年度以降も継続・発展していきたいという思いを、内外と確認しあうことが出来た。



福島県逢瀬町野菜販売

(7) 埼玉県南西部地域振興プロジェクト「ジモトの魅力伝え隊」

10月19-20日で開催、ふじみ野市、富士見市などとの連携活動で、市内の名所・旧跡を自転車で行く資源発掘ツアーである。ふじみ野キャンパスも名所の一つに加えていただきあやめ祭に30名の地域住民が訪れた。

【活動概要】

埼玉県南西部地域に暮らす人々の交流を活発化させる仕掛けづくり、地域の魅力を開拓し交流に活かす事業、学生たちの活動を広く社会に広めるための広報活動が主たる事業内容である。南西部地域の名所・旧跡を自転車で巡るツアー企画の開発、シンポジウムの開催、学生による活動報告会などを実施し始めている。

(8) ふじみ野市地元企業経営者との産学連携プロジェクト会合の開催

ふじみ野市内企業の経営者会合での話が発端となり、産学連携事業を開始することとなった。すでに3回のワークショップを経て活動内容も絞られている。現在、人間福祉学科の武田先生を中心に企業-大学教員・学生の交流プロジェクトが動き始めようとしている。



産学連携ワークショップ

(9) 富士見ふるさと祭り

10月26日に埼玉県から学生研究員が依頼を受け、特設会場にてまちラボふじみ野の活動報告を実施した。



富士見ふるさと祭りにて活動報告

(10) ふじみ野市主催「新たな文化施設の管理運営について」

12月15日から2回の予定で始まる上記ワークショップに、ふじみ野市役所から依頼を受けた学生研究員4名が参画し、行政の若きアドバイザーとして評価を得ている。

(11) 森のクニニュータナ教室

11月11日、25日に、文京学院大学ふじみ野幼稚園年少クラスを対象とする自然あそび活動、クニニュータナ教室を実施した。文京学院大学ふじみ野キャンパスの自然を活用しながら、五感で自然に触れ、遊び、学ぶ活動を、児童発達学科学生と菖蒲澤運営委員、森下研究員の共同のもとに計画し、実行した。

【連携先】

文京学院大学ふじみ野幼稚園

【活動概要】

文京学院大学ふじみ野キャンパスの自然を活用した、自然と遊びながら自然について感じ、知り、学ぶ教室である。文京学院大学ふじみ野幼稚園年少クラスを対象とし、児童発達学科4年生と教員研究員が内容を検討し、実施した。環境教育センターにおいても実践が続いてきた活動であり、今年度はこれまで長くこの活動に関わってきた学生と教員研究員がアイデアを出し合い、自然とのかかわりにおいて新たな刺激になったり、活動の成果を共有したりするためのブースを設けた。



森のクニータナ教室

(12) 埼玉県ふじみ野市産学連携プロジェクト

【連携先】

ふじみ野市内企業、埼玉県ふじみ野市市民活動推進部、人間福祉学科

【活動概要】

ふじみ野キャンパス周辺の企業から産学連携の依頼が届いたのを契機とし、現在、産学連携で何をしたいのか、何ができるのかを検討している段階である。企業経営者は大学の知的資源を従業員教育に活用したいと考えているが、とくに、地域に関心を持ち地域に根差した企業へと変容していくための基礎教育を受けさせたいとの意向がある。

人間福祉学科とコミュニケーション社会学科が連携し、地域に根差す企業、企業人の育成プログラムを練っている最中である。

(13) まちづくりワークショップの開催

1月から3月にかけて、大井総合支所にて地域住民、自治体、企業、まちラボふじみ野の学生たちが立場を超え話し合い、どのようなまちづくりを協働で進めていくのかについて3回にわたりワークショップを開催した。内閣府地域活性化伝道師・経済産業省タウンプロデューサーも参画し意見の交換を行った。



まちラボワークショップ

3. まちラボふじみ野運営委員より

まちラボ野外会議@桑原商店（2019年7月30日）に参加して

人間福祉学科 田嶋英行

五反田の酒屋さん「桑原商店」で、ご主人に地域活性化のテーマでご講義いただき、学生ともども参加させていただいた。人間福祉学科からも自分のゼミ生が2名ほど参加させていただき、いろいろな意味で影響を与えていただくことができた。とくに印象的だったのが、アートやデザインの力を使って、地域を盛り上げていこうとすることをご主人の方針である。「きれいなもの」や「かっこいいもの」は、誰でも好きである。さらにそれらに「おいしい」という要素が加わると、より多くの人たちが惹きつけられることになる。今回のご講義を受けてみて、そのことがとてもよく分かった。実際に帰りぎわ、お店でプロデュースされているお酒を買っていき、家族と一緒にいただいたが、中身のお酒も味もさることながら、包装のデザイン性の高さにいたく感激していた。「アート」や「デザイン」について、これからも積極的に学んでいきたいと思った。

商店街の空き店舗活用

心理学科 文野 洋

環境教育研究センターより継続で運営委員を務めさせていただくことになったものの、今年度は周縁的な参加しかできない状況であったため、プロジェクトの進捗を見守るのみであった。

4月当初に、空き店舗を利用させてもらえるかもしれないという話をうかがったときには、駄菓子屋「ぶんぶん」を週に1回営業するという現在の活動は予想できなかった。ここに至るまでの過程で、商店街をはじめとする地域の方々や市担当職員の方々等から多くのご厚意とご協力をいただいた。心より感謝を申しあげたい。

それにしても、学生研究員の奮闘はなかなかのものだった。教職員のサポートを得ながら、1つ1つの課題について話し合い、暑い日も寒い日もコツコツと作業をこなしていた。これまでの活動の中ですでに多くの学びがあったことと思う。また、ようやく漕ぎつけた駄菓子屋の開店で、多くの子どもたち、保護者の方たちを迎えられた喜びは格別なものだったに違いない。

まちラボ1年目の活動としては、よいスタートとなった。2年目は、これまでの流れを引き継ぎ、店舗の運営を安定させていくことが当面の目標になる。まだまだ抱えている問題もあるが、学生研究員の各メンバーには、地域の方々から寄せられている期待も糧にして、ま

た着実な歩みを進めていってほしい。私たちも活動をサポートしながら、本プロジェクトの目指す商店街や地域の活性化に対する貢献について一緒に考えていきたい。

郊外まちづくりプロジェクトを担当して

まちラボ研究員 岩舘豊

2019年4月から着任し、ふじみ野市を中心とした郊外のまちづくりプロジェクトを担当している。とくに、ふじみ野市産業振興課や大井・亀居の両商店街の皆様、町会の方々と連携しながら、商店街空き店舗を活用するプロジェクトに取り組んできた。試行錯誤を経ながらも、2019年12月からは、駄菓子屋「菓子屋ぶんぶん」の試験的営業を開始し、毎回多くの子どもたちやその保護者の方々などが足を運んでくれている。

こうした活動が可能になったのも、昨年度までの環境教育センターからの蓄積の厚み、前年度「駄菓子屋ふみちゃん」を考案した学生たちの取り組み、埼玉県やふじみ野市による支援、大学と地域社会とのつながりがあったからである。大学や地域社会に埋め込まれてきたつながりや経験や知の蓄積という「土壌」があったからこそ、菓子屋ぶんぶんという小さな「芽」が出たのだと思う。

2019年7月31日、空き店舗だった旧・信濃屋さんの片付けから実質的な活動が始まりました。一夏をかけて、学生たちは、汗と埃にまみれながら、ダンボールなどを片付け、床をブラシでこすり、自分たちの活動場所をつくっていった。そして、商店街で実際に身体を動かすことで、地域社会でのつながりと空間を生かすアイデアが生まれ、秋のおかめフェスとあやめ祭を経て、12月に「菓子屋ぶんぶん」開店へと至った。持続的かつ熱心に取り組んでくれている学生の皆さんに敬意の念を覚えずにはられない。

「菓子屋ぶんぶん」はまだ生まれたばかりで、やるべきこと、やりたいことはたくさんある。今年1年の経験をふまえ、到達点と課題を明確にしながら、少しずつでもこの小さな「芽」を育てていければと思っている。

これまでお力添えいただいている多くの皆様に心から感謝申し上げます。また、店舗を活動場所として提供してくださっている旧・信濃屋の皆様、本当にありがとうございます。今後とも何卒よろしく願いいたします。

1年間を振り返って

事務担当 渋谷由佳

若い子にまだまだ力はあるなあ。駄菓子屋ぶんぶんの活動の開店直前から学生を見守る中で、そんな風に感心させられ、いつも学生に元気をもらっている。

みんなで考え行動し、多くの壁にぶつかりながらも菓子屋ぶんぶンをオープンし営業していくことは、学生たちの今後の学びの中でも大きな経験になるのではないだろうか。

昨今、リーダーシップ力のある人材教育が行われる中で大切なことは何か。机上で行われる勉強だけが全てではないことを学生は十分に感じたはずだ。

空き店舗を探すための大家さんとの交渉、営業に必要なインフラを整備することで浮上した不動産登記の問題など、想像以上の多くの問題を解決するために欠かせないミーティングを繰り返し仲間とコミュニケーションを図ることの大切さを感じてくれたと思う。

また、face to face がコミュニケーションの原点になることも実感したはずだ。学生が得意とする LINE を駆使しながら、共有したはずの業務の認識のずれを週 1 回の定例会で微調整を繰り返す。リーダーや各業務の部門のリーダーが意見をまとめ、指示を出す。他の学生は授業の合間を利用して、遅くまで準備をする。これを何度も何度も繰り返して、駄菓子屋ぶんぶんの開店までこぎつけたことに、ぜひ学生みんなが自信を持って欲しい。そして、学生だけではなくたくさんの方の協力の下で成り立つのだという感謝の気持ちも決して忘れないで欲しいと思う。

さらには、まちラボの学生のとどまらず、ここから発信される元気やパワーがふじみ野に通う小中高校の学生にも拡散され、ふじみ野の街が生き生きした街になることを願っている。

大胆さと慎重さの中で

児童発達学科 菖蒲澤 侑

まちラボの最初の 1 年は、あふれる希望と可能性の中で夢が広がるとともに、かかわる全ての人の誠実さと知見によって常に慎重に状況を検証しながら、結果、少しずつ、しかし確実に、どこかに向かって進んだ 1 年であったように思う。

希望と可能性は確実にあふれている。学生、教員、連携先、協力者、すべての人々を「研究員」として捉え、《やるべきこと》と同じくらい《やりたいこと》を重視する。その実現のために、それぞれが出来ることを持ち寄るだけではなく、頑張れば出来そうなことに挑戦する。例えば自身関わったプロジェクトで言えば、前身の環境教育センターで続けてきた森のクニータナ教室は、学生研究員の「今年もやりたい」という思いから、新しい挑戦を含みながら実現した。商店街では試行錯誤の中で駄菓子屋が生まれ、愛され始めている。

同時に、誰かが意に沿わない無理をしていないか？このままではどこかが蔑ろにならないか？それを常に検証するムードもあるように感じる。協働することについて知識や経験があるためであろうか、闇雲にプロジェクトの実現を目指すのではなく、充実と継続を意識して、互いに確認しあいながら取り組んでいた。

大胆さと慎重さの中で、様々な人とともにプロジェクトに取り組む幸福を感じながら、自身が学び、試みた 1 年間であった。

4. 掲載誌等

<新聞>

- 2019年9月6日 読売新聞オンライン「第10回『農』と里山シンポジウム～三富（さんとめ）を未来に～」
- 2019年9月6日 朝日新聞DIGITAL「里山のシステムと次世代の農業を通じた地域づくりについて考える “第10回「農」と里山シンポジウム ～三富（さんとめ）を未来に～」
文京学院大学の教員、研究員、OB2名の計4名が登壇」
- 2019年9月13日 Smart AGRI「次世代の担い手たちによる農ある地域づくりを考える
「第10回『農』と里山シンポジウム」
- 2019年9月14日 産経デジタル「里山のシステムと次世代の農業を通じた地域づくりについて考える “第10回「農」と里山シンポジウム」
- 2019年9月21日 日本農業新聞「農と里山を考える」
- 2019年9月26日 朝日新聞（埼玉）「三富の循環型農業 持続発展を考える 文京学院大でシンポ」

<埼玉県>

- 2019年8月29日 埼玉県県政ニュース 埼玉県南西部地域の見どころをボランティアガイド「ジモトの魅力伝え隊」と巡る自転車ツアー
 - 2019年9月5日 彩の国インフォメーション ふじみ野市の文京学院大学ふじみ野キャンパスを会場に第10回「農」と里山シンポジウムを開催します。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0902/library-info/r1satoyamashinpo.html>
<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0001/news/page/2018/1024-01.html>
<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0001/news/page/2019/0829-02.html>
 - 2019年9月14日 三富地域ネットワーク ふじみ野キャンパスで開催「農と里山シンポジウム」
 - 2019年10月18日 埼玉県県政ニュース 文京学院大学の学生による「まちラボ」活動報告 地域住民、商店街及び行政と連携して地域の課題解決に取り組む文京学院大学の学生が、「まちラボ」の活動状況を発表します。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0001/news/page/2019/1018-03.html>
 - 2019年9月6日 PR TIMES 里山のシステムと次世代の農業を通じた地域づくりについて考える “第10回「農」と里山シンポジウム ～三富（さんとめ）を未来に～」 文京学院大学の教員、研究員、OB2名の計4名が登壇
- ### <埼玉県ふじみ野市からの依頼講座>
- 2019年4月 『環境』でつながる地域をめざして ふじみ野市講演会&ワークショップ
 - 2019年5月 生涯学習と協働のまちづくり「ふじみ野市生きがい学習推進計画」策定に係る研修会
 - 2019年6月5日 産学連携の可能性 キラリと光る地域企業交流会講座

文京学院大学まちづくり研究センター
報告書 2019年度

発行日 2020年3月31日

編集・発行 文京学院大学まちづくり研究センター

まちラボ本郷

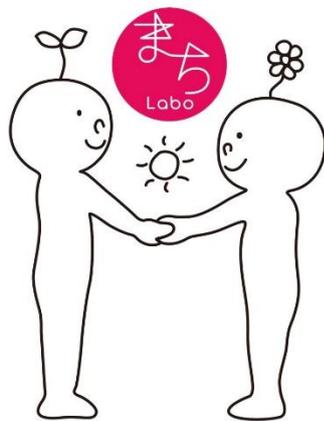
〒113-8668 東京都文京区向丘 1-19-1

TEL : 03-6240-0897 FAX : 03-6240-0898

まちラボふじみ野

〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保 1196

TEL : 049-261-7859 FAX : 049-261-7864



まちづくり研究センター Social Design Center